

はしがき

2022年6月18日～19日開催の第164回大会予稿集をお届けします。この大会も、コロナ禍のため、引き続きオンライン開催となります。依然として収まらない感染状況のもと、大変困難な状況での大会開催ですが、大会運営委員長の江畑冬生氏をはじめとする大会運営委員のみなさんの献身的な努力により、無事開催されることになりました。これらの方々には心よりお礼を申し上げます。

今回の第164回大会には64件の応募があり、うち49件が採択されました（内訳：口頭発表40件（そのうち発表辞退1件）、ポスター6件、ワークショップ3件）。今までの大会同様、様々な言語（あるいは言語一般）を対象とする、極めて多様なアプローチによる研究発表が予定されています。

大会2日目（6月19日）に行なわれるのは、太田真理氏の企画・司会による公開特別シンポジウム「言語脳科学が切り開く言語学の未来」です。神経科学における技術的進展は著しく、それを受けて、言語学と神経科学・脳科学の協働を目指す試みも目立ちますし、両分野の係をかけたシンポジウムも近年いくつか開かれています。その中で、このシンポジウムの特色は、神経科学と言語学が緊密に連係した「言語脳科学」とも言うべき分野を長年にわたって主導してきた研究者（酒井邦嘉氏）による言語脳科学分野の概観が得られると共に、数年後には分野の先端で研究しているであろう — まさにこれから研究者としてのキャリアを始めようとしている — 若手研究者（梅島壘立、中村一創両氏）が、言語脳科学という分野のどういう面に学問的興味を持つのか、脳科学から見て言語学に、あるいは逆に言語学から見て脳科学に、どのような期待と不満、さらには将来への希望を抱いているのかを率直に語ってもらうところにあるかと思ひます。このシンポジウムを通して、若手研究者の「本音」を聞く良い機会が与えられるのではないかと思ひます。

コロナ禍の中、何度もオンライン大会を経験し、研究発表やディスカッションに限っていえばだいぶ慣れてきた感じがします。その結果、学問的議論に関してはそれほど不自由なく行なえるようになってきたのではないのでしょうか。懇親会に代表される学会の社交的側面に関しても、何とか会員の相互交流を図ろうと、今回の大会においても休憩室や懇親会について大会運営委員会が最大限の工夫を凝らしてくれていると聞いていますので、ぜひご参加ください。

最後になりましたが、今大会も今までと同様、事前の参加登録と参加費の支払いが必要となりますので、どうかご登録をよろしくお願ひいたします。

2022年6月

日本言語学会 会長 福井 直樹